

文化の担い手が伝える「文化」とは何か

—短期交換留学プログラムにおける文化体験学習の意義再考—

森川結花

甲南大学 国際交流センター
神戸市東灘区岡本8-9-1, 658-8501

要旨

甲南大学Year-in-Japanプログラム日本語コースでは授業の一環として日本文化体験学習が毎年実践されている。本研究では、その文化体験活動に指導者役として参加していただいている文化の担い手3人を対象に、彼らがどんなことを短期交換留学生に向けて伝達しようとしているのか、また、この活動を通して彼らがどんな手応えを得ているのかについて聞き取り調査を行った。その結果、文化の担い手たちは、非常に前向きな気持ちで自身の文化の伝達をしようとしていることや、異文化との交流体験から逆に大きな刺激を受けて文化伝達への動機づけを強めていることがわかった。また、その伝達は必ずしも言語に頼る必要はないと認識していることも明らかになった。

キーワード: 日本の伝統文化, 文化の担い手, 体験学習, 文化の伝達

1 はじめに

この稿でいうところの「文化」とは、日本の伝統的な文化として一般的にイメージされるものを指す。筆者が日本語教育に携わっている甲南大学 Year-in-Japan プログラム（以下、YiJ プログラムと呼ぶ）日本語コースでは、秋・春学期の研修旅行（秋：高野山、春：広島・宮島）、現代短歌創作、能楽体験など、神戸・甲南大学ならではの地の利と人脈というリソースを活用して文化体験学習の実践を行っている。

このようなオーセンティックな文化とその担い手に直接接する機会を授業の場で設けていることは、それだけでも意義を認めて良いものだと思う。しかし、森川(2022c)で述べたとおり、現場では日本語教師からも学習者からも、「伝統文化のワークショップを日本語の授業でやって何になるのか。たった一回の体験でどれほど日本語が上達するのか」といった批判が生じる

こともある。

文化体験を日本語コースのカリキュラムに組み込み、授業として実践することにどんな意義が認められ、効果が生じているのか。それは「批判」を抑えてでも実践する価値のあるものなのか。そのことを明らかにすべく、筆者と共同研究者は①研修旅行や文化体験ワークショップなどで実際に留学生の指導にあたってくださった文化の担い手と、②それに参加したプログラム修了生を対象に調査を進めている。2021年度中に行なった①を対象としたインタビュー調査では、文化の担い手たちがどのような思いを持って外国人と向き合い、何を伝えようとしているか、そして、実際にその実践を行ってどんな手応えが得られたかの語りを聞き取ることができた。本稿ではその調査結果を報告する。

2 先行研究

日本語の授業における伝統的な文化を体験する活動の実践に関して、これまで報告されてきた先行研究はそれほど数多くはない。文化体験活動は長らく、息抜きを兼ねたリクリエーション活動であり、ただ楽しいだけの3つのF (Food, Fashion, Festival) に収束するものとみなされてきたからであろう。しかし、近年に至って青木・脇坂・小林 (2013) や清水 (2016) のような本格的な CLIL 理論に基づいた授業実践も報告されるようになった。それらにおいては、歌舞伎や茶道など日本の伝統文化を題材とし、実際の文化体験もカリキュラムに組み込んで、文化と言語の学びを実現させている。

CLIL ほど本格的なものではないもので文化体験学習全般についての指導書として出された国際交流基金関西国際センター(2008)では、伝統文化を扱う章で、主な伝統文化(茶道、華道、書道、着付け)が紹介されている。これと同様の指導書である長谷川・池田・竹山 (2021) でも伝統文化や季節行事の紹介をした上で、具体的な活動として「着付け」と「書き初め」が紹介されている。これら指導書では、まずはその伝統文化について知ることが目的とされ、その次の段階では日本語使用に絡めて報告用メモやインタビュー活動、発表準備などが紹介されている。このような形で学習者にいろいろな文化の入門的紹介をするとともに、文化をテーマにした言語活動をさせることを目指している。

さらに、コロナ禍対応のオンライン授業が隆盛した頃、米本・濱田・高井・水野・加村・長谷川・葛西・北川 (2021) は、オンライン伝統芸能「紙切り」を体験する4つの活動実践を行い、その結果を報告した。それらの実践では、「紙切り」という芸能を知り、楽しさを味わうことが目的となっていた。

本稿の筆者は2015年ごろからYIJプログラム日本語コースにおいて先行研究と同様の文化体験学習を授業活動として実践してきた。その中で、文化体験をさせることとその学習効果について、「オーセンティックな文化(人)に触れること」が「日本語を使うこと」を促進するという道具的な意義以上に学習者にとって有益な意義を探りつつ、実践と学習者からのフィードバックを分析してきた。森川(2021)では、細川(1997)(1998)(2003)に基づいて能楽体験ワークショップでの気づきを記録し、留学生の内面の変容を可視化する試みを実践したが、その活動実践に

参加する留学生の取り組み方に「温度差」があることも否めなかった。この問題点を解消すべく、能楽体験ワークショップの事前授業の教材として用いる視聴覚教材（動画教材）を開発し、森川(2022b)で学習者モニターを対象に行なったパイロット調査の結果を報告した。

また、文化体験学習に関わる文化の担い手はどんな思いを抱いて学習者に向き合っているのか、その一例として森川(2022a)で能楽師 K の語りの分析結果を報告した。さらに、文化体験学習について日本語教師はどのように認識しているのか、教師を対象とした聞き取り調査も進めており、森川(2022c)で「日本語の授業で文化は教えない」という信念を持つ教師の語りの分析結果を報告した。これら一連の研究に引き続き、本研究では調査の対象を広げて分析する。

3 研究の目的と方法

3.1 研究の目的

本研究では、日本文化の担い手が外国人に自己の文化を伝えるとき、最も伝えたいと思う本質的な内容は何か、また、その活動を実践して、文化の担い手はどのような手応えを得ているか、インタビューを通して分析する。そして、その結果について、このような文化を体験する活動がいかにして日本語を学ぶ短期交換留学生にとって肯定的な意義を持つことになるのかを考察することを目的とする。

3.2 研究の方法

3.2.1 研究参加者とそのプロフィール

本研究では、過去に YIJ プログラムの日本語授業および研修旅行において行われた文化体験学習に指導者の立場で参加した文化の担い手 3 名に調査の対象として研究に参加していただいた。3 名のプロフィールを表 1 に示す。

表 1 研究参加者のプロフィールと文化体験の内容

参加者	僧侶 Y	現代歌人 N	能楽師 K
YIJ プログラムでの文化体験の実践年度	1980 年代より 年 1 回実施	2017~2019 年まで 年 1 回実施	2019 年~2020 年まで 年 1 回実施。
実践回数	20 回以上	3 回	2 回

文化体験の実践内容	<ul style="list-style-type: none"> ・高野山研修旅行における宿坊での「阿字観」体験。 ・留学生からの質問に答える「お坊さんに聞いてみよう」 	<ul style="list-style-type: none"> ・短歌創作のための基礎知識の解説。 ・短歌カードを用いた短歌の創作練習。 ・オリジナルの短歌を詠む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・能の実演。 ・構え、すり足の練習 ・能面をつけて動く。 ・謡の一節の練習。 ・ワークショップ当日はメイン講師をKの子息Tにし、K自身は地謡と補佐役として参加。
備考 1:YiJ プログラム キャンセル期間(2020年9月～2022年3月)に甲南大学関連で行った活動。		2021年、オンラインイベント”Kobe through Tanka”に指導者として参加。対象はアメリカ、カナダ、韓国、台湾などの大学生。	2021年、オンライン文化イベントの一部として能楽体験を実践。対象はアメリカ、中国、台湾、タイの大学・大学院生/社会人。
備考 2:YiJ プログラム 以外での外国人との交流やワークショップ指導経験	<ul style="list-style-type: none"> ・多数。高野山を訪れる海外からの旅行者を対象に案内、解説。フランスからの旅行者との接触が多い印象がある。 ・外国人宗教家や外国人研究者と対談やパネルディスカッションなどの活動。 	・2021年から2022年にかけてオンラインでワークショップを複数回実施。対象は中国の大学生/フランスの高校生など。	2006年、国交回復50周年記念事業においてフィリピンの大学生選抜者に能楽公演に向けての指導。 ・欧米諸国での海外公演多数。

なお、能楽師Kのインタビュー結果については、森川(2022a)ですでにSCATによる分析結果の報告を行なっているが、対象者1および2との比較参照のため、本稿でも能楽師Kの語りを再掲する。

3.2.2 調査方法

調査はZoomを用いて個別にミーティングをする形で半構造化インタビューを行った。調査対象の研究参加者に事前に送付したインタビューガイドの質問項目(概略)は以下の通りである。

- 1) ご自身のお仕事について (きっかけ、プロになるまでのプロセスなど)

- 2) これまでの国際交流、国際的な普及・伝達活動について（いつから、どのように、など）
 - A 外国人との接触／交流を始めた時期
 - B 外国人に向けての普及活動、研修、体験活動の指導としてやったこと
 - C 「外国人向け」ということで指導上、心掛けていること
 - D 「日本人に伝えたいこと（思い）」と「外国人に伝えたいこと（思い）」の違い
 - E 外国人の持つ日本文化に対する思い込みや誤解（偏見）に関する気づきはあったか
 - F 外国人に対する指導／普及活動で得た手応えや確認できた外国人の変化
 - G 外国人と接触することによる気づきやご自身の变化
- 3) これからの国際交流・伝達・普及活動について（目的、活動の理想像、伝えたいことなど）

インタビューは Zoom のレコーディング機能を用いて録画し、音声を文字化したのちアイデアユニットを抽出してストーリー化し、分析を行った。

なお、本研究のインタビュー調査の研究倫理に関しては、甲南大学ヒトを対象とした研究に関する倫理審査委員会にて審議され、承認されている。

4 結果

4.1 インタビュー・データ

実際に行われたインタビューについて、表2にデータを示す。

表2 インタビュー・データ

参加者	僧侶 Y	現代歌人 N	能楽師 K
実施時期	2021 年 11 月下旬	2021 年 11 月上旬	2021 年 11 月下旬
インタビュー時間	126 分	67 分	58 分

4.2 インタビューより得られたストーリー

上記のインタビューから、【外国人に文化を伝える活動をするようになったきっかけ】、【外国人に伝えたい内容・思い】、【日本人を対象とする時と外国人を対象とする時の違い】、【外国人に文化を伝達する際の工夫】、【自身が得た気づきや手応え】【これからの活動についての理想や希望】のアイデアユニットの要点を再構築してストーリー化したものを以下に示す。

4.2.1 僧侶 Y

【外国人に文化を伝える活動をするようになったきっかけ】

- ・子供の頃から海外から高野山を訪れる外国人を見てきている。その頃は、「日本人なら何度も高野山を参拝するリピーターになるが、外国人は一回来て帰るだけの観光客。高野山の宗教性はわかってもらえない」というところで線を引いていた。今は、むしろ高野山に精神性を求めてきているのは海外の方の方が多いと思う。
- ・高野山を訪れる旅行者はコロナ禍前の最盛期で 85%が欧米豪、特にフランスからの人が多

い印象がある。高野山が世界遺産に認定されてから15年になるが、そうってからこの傾向はますます強まっていると思う。

【外国人に伝えたい内容・思い】

- ・「東洋の精神性」。東洋には融合、親和性があり、精神性が深く見えないものを大事にするところがある。今、瞑想が世界的に流行しているが、これは世界中が「東洋にある訳のわからないモヤツとしたもの」に興味を示しているのだろう。高野山を訪れる旅行者はそれを求めていると思う。
- ・「自然」を「じねん」と呼ぶ仏教の自然観。大自然を神様からの産物としてありのまま、人間の犯さざるものとして受け入れる。
- ・「道」に象徴される東洋的な感覚。「道」というのは建物も何もない人が通るだけのものだが、歴史的な、何千、何万、何億人という人が思いを抱いてここを歩き、今も人が歩いている。それを大事にしているという感覚。

【日本人を対象とする時と外国人を対象とする時の違い】

- ・精神性、宗教性の高さにおいて日本よりも海外の方が絶対に上だと思う。西洋人より日本人の方がむしろスピリチュアル、宗教的な話を嫌がる。日本人は「無宗教がインテリだ」みたいな考え方があると思う。我々僧侶も日本人に向けてスピリチュアルな話をすると嫌がられるという認識がある。

【外国人に文化を伝達する際の工夫】

- ・高野山の宗派は「密教」、秘密の教義。つまり、言葉では表現できず伝えることのできない主観の世界、感覚的な宗教である。体感する宗教なので、むしろ言葉はいらない。我々が西洋の深い文化を知るよりも西洋の方が東洋の文化を知る方が馴染みやすいような気がしている。
- ・瞑想の流行、高野山（紀伊山地の霊場と参詣道）の世界遺産登録などの具体的な例を踏まえると、現在は西洋の価値観が東洋に近づいてきていると思う。それを思うと東洋的な感覚も伝わりやすいと思うし、その際に言葉は必ずしも必要ではない。

【自身が得た気づきや手応え】

- ・外国人旅行者は高野山にスピリチュアルなものを求め、真剣に質問してくる。こちらも真剣に答える。
- ・深い精神性を感じに来ている外国人に接することで我々も反対に教えられるし、自分の体でそういうものを感じられるように修行をしていかないと、求められていることに応えることができない、そのぐらい高いレベルのものを求められていると反省する。もちろん、最低の知識も必要である。

【これからの活動についての理想や希望】

- ・これから海外の人に伝えていきたいことは「気持ちよさ」、つまり、風が気持ちいい、天気良くて気持ちいいという感覚を持たせることである。瞑想の時の姿勢や呼吸法も気持ちの良さを感じることに繋がる。瞑想中に感じたことを否定せず、全て肯定的に受け入れる。森林セラピーのようなプログラムを留学生にも体験してもらいたい。

4.2.2 現代歌人N

【外国人に文化を伝える活動をするようになったきっかけ】

- ・2017年にグローバルゾーンでワークショップをやらなかと突然声をかけられたのがきっかけ。自発的に考えたことはなかった。確かに日本の短歌に興味を持ってくれる留学生はいらっしゃるとその時初めて思った。少し逡巡はあったが、なんとかなるだろうと思って引き受けた。

【外国人に伝えたい内容・思い】

- ・短い言葉の中で自分の思いを伝えるために、他の情報を削ぎ落とし、自分の伝えたいことに向き合ってそれを伝える、それが短歌の良さである。創作の中で自分と向き合うことが大切であることを伝えたい。
- ・世界的に見ても珍しい短詩型の文芸文化が日本にはあり、それをやる意義がある。私自身もそれを大事にしているし、それに興味があったら皆にも始めてもらいたいという思いがある。これは、外国人だけではなく、短歌をよく知らない日本人にも伝えたい。
- ・趣味の中に「創作」というものがない人でも短歌なら始められる。短歌は創作活動の中でも最もハードルが低い。だから、短歌を知り、その後で実際に創作してみたい。アウトプットすること・表現することでようやく救われるものがある。出来事や気持ちを創作で表現して昇華させるという、創作の根本の良さに一番近いのが短歌である。

【日本人を対象とする時と外国人を対象とする時の違い】

- ・外国人は短歌そのものを知らない。日本人なら「五・七・五・七・七の」といえば通じる。
- ・文字の数え方と音の数え方が違うので、ワークショップのたびに手こずる。

【外国人に文化を伝達する際の工夫】

- ・毎回、導入部分（音、拍数の数え方）を丁寧にするように心がけている。

【自身が得た気づきや手応え】

- ・アンケートを読んでいると、結構楽しんでくれているという印象だが、難しいという意見もあって、それはやっぱり消せない。それを何とかしようと思って、カードゲームを使っている。カードゲームに関しては「本当に楽しかった」という意見が多いが、それで短歌自体の良さがどこまで伝わっているのかはわからない。
- ・外国人や先入観のない中学生からは「そもそも」の質問をされる。甲南の留学生から有名な俳句について「これの何がいいんですか」と質問されて、そういえば何がいいんだろう

と考えた。そのように、あらためて考えさせて再発見、勉強のし直しをするということがある。

- ・中国の学生に教えた時、「こういう創作ではなく、もっと伝統的な有名な短歌を通じて短歌の良さを知りたかった」というのがあった。短歌の成り立ちから歴史、有名な短歌の紹介なども求められることがあると知った。

【これからの活動についての理想や希望】

- ・日本語教師向けの講座を続け、強化していきたい。自分は平日に学生向けに教えることはできないが、日本語教師だけでなく教育者向けに短歌を楽しく学ぶヒントを提供していける。そのために自分が作ったパワーポイント教材を配布してもいいと思っている。
- ・単純に、自分の好きなものを広めたいからという理由で短歌を広めていきたい。特に、授業の一環としてその活動をし、「短歌って全然興味ないわ」という人に向けても発信していきたい。自己開示の苦手な人に向けて、自己開示のハードルを下げる工夫もしていきたい。
- ・やってみないと、嫌いかどうかはわからないので、ぜひ1回やってほしいと思う。たとえ短歌創作には向いていなくとも、短歌というものがあり、それを専門にやっている人がいるということが伝われば十分だと思う。

4.2.3 能楽師K

【外国人に文化を伝える活動をするようになったきっかけ】

この項目についてはKのインタビュー時に筆者もすでに既知情報であったので、インタビューデータの中には含まれていなかった。以下はその情報の概略である。

- ・国際的に活躍する能楽師として、欧米諸国での舞台公演の経験を数多く持つ。また、国交回復50周年記念事業としてフィリピンで、現地の大学生選抜チームに能楽公演までの実技指導にあたった経験もある。
- ・KがYiJプログラムの留学生向けの能楽ワークショップに指導者役として参加するようになったのは子息Tを通じてである。2018年、当時甲南大学1年であったTと筆者が偶然に知り合ったことから縁が繋がった。

【外国人に伝えたい内容・思い】

- ・能のテーマには男女、親子など国や時代を超えた普遍的なテーマが多い。それをみんなが感じているということを知ることは大事なことだと思う。
- ・(外国人に限らず能の舞台公演一般について) 能は作品についての自由な解釈を許すものであり、観客の方も感受性を鋭くして舞台上のパフォーマンスを受け止めてほしい。能はそうにして演者と観客の双方で一つの舞台を作り上げていくものである。

【日本人を対象とする時と外国人を対象とする時の違い】 【外国人に文化を伝達する際の工夫】

- ・フィリピンでの実技指導において感じたことだが、言葉では伝わらず通訳にも限界がある。そこで双方が手探り状態で意思伝達を図る。そうしていく中で、何か感じるものがあった、

それが伝わっていくのがわかり、面白かった。やっぱり言葉やないんやなと思った。

【自身が得た気づきや手応え】

- ・留学生対象の能楽体験ワークショップを指導する能楽師（Kの子息T）にとって、この機会は自らの文化を見つめ直し、異文化を背負う人に対する文化伝達について考えるきっかけとなっていると思う。この経験を通じてTの能楽師としての成長を期待することができる。
- ・海外での公演から、能の作品に込められた人類普遍のテーマが言語の違いを乗り越えて観客に感動を呼び覚ますことを経験した。この経験から、「伝わる」ことについての確信と、「伝える」ことに対する使命感を抱くようになった。

【これからの活動についての理想や希望】

- ・能を世界の人に見てもらいたい。舞台の上でもワークショップでも、同じことをしても違う捉え方があるということをも自分も感じて視野を広めていきたい。双方向のやり取りのともなった活動をしたい。
- ・双方がお互いの文化を尊重し合う活動をしていきたい。また、若い人には自分の国の文化について、胸を張って語れる人として成長してほしい。

4.3 三つのストーリーの共通点

僧侶Y、現代歌人N、能楽師Kのストーリーには次のような共通点が見られる。

- <共通点1> 自身の持つ文化（高野山の密教文化、短歌、能）がそもそも誰にでも体験しやすい要素を備えていると確信している。
- <共通点2> 自身の文化の意義をよく認識しており、その伝達について強い動機づけや使命感を持っている。
- <共通点3> 自身が外国人への文化の伝達を行ってみて、自分自身及び自分の文化についての振り返りや自己の成長を促すきっかけとなったと肯定的に捉えている。
- <共通点4> 将来も異文化と交流し、自分の文化の伝達をしようという目標意識を持っており、具体的なビジョンもある。
- <共通点5> 僧侶Yと能楽師Kに関して特に人間の感覚や感受性を重視している。文化の伝達についても、感覚的なものが伝わっているという実感を持っており、言語の伝達力については否定的である。

<共通点1>について、密教の修行、短歌、能、どれもプロになってその道を究めることは誰にでもできることではない。しかし、少し入り口のところだけ体験する分にはちょうど良くできている。例えば、能は江戸時代、武家の式楽とされたためアマチュアでも取り組めるように型が簡略化されたという。改良されてユニバーサルデザイン化がなされたわけである。短歌も然りで、現代語で表現を考えれば良い。高野山は現地へ行ってその大自然と霊場の様子を見ることが体験の第一歩である。

<共通点 2>について、3 人とも自身の文化に人類全体に共通する普遍的な意義を認めている。歌人 N は「表現することで救われることがある」という普遍的な意義とともに、「単純に自分の好きなものを広めていきたいから」という個人的な動機があることも表明しているが、その感情が動機づけを支え、活動を続けることにつながっていると考えられる。

<共通点 3>について、外国人への文化の伝達の活動が 3 人にとって最終的に「成功体験」と捉えられているとも解釈することができる。成功体験からは自信が生まれ、活動継続への動機づけが強められる。歌人 N に至っては「『短歌って全然興味ないわ』と言う人に向けても発信していきたい」と言うほど挑戦的である。この強い動機づけが<共通点 4>につながる。

<共通点 5>については、「文化はそもそも非言語情報の集積体である」と考えると、文化の伝達を「非言語情報のやりとり」と捉えることができる。すると、たとえば能楽師 K が発したように「やっぱり言葉やないんやな」と言う結論に自ずと到達する。この点を言語教育である日本語教育の中で肯定的に捉えようとするならば、言語の教育の中で非言語情報の伝達スキルを上達させることや感性（感受性）を育てることも射程に入れ、それが言語の上達にもつながるという事実、実例をあげて根拠としていく必要があるだろう。

5 まとめと今後の課題

コロナ禍前、2018~2019、2019~2020 年度の YIJ プログラム参加留学生は、秋に高野山を訪れ、晩秋に短歌の創作、冬には能楽ワークショップを体験した。彼らに向き合ったのは本研究のインタビュー調査に協力して下さった僧侶 Y、歌人 N、能楽師 K である。当時はこの 3 人の文化の担い手の思いを汲まぬまま、文化体験学習を留学生の日本語教育とどのようにつなげたらよいか、特に、この体験を日本語の上達（感）につなげることに関心を向けていたため、ワークショップのデザインや実践後のフォローも、通りいっぺんの表面的なものでしかなかった。

本研究で明らかになったのは、文化の担い手、特に僧侶 Y と能楽師 K は文化の伝達に関して言語の伝達力は認めていないということであった。彼らは言語ではなく、感性（感受性）をターゲットとしている。そのような留学生の内面に向けたアプローチと、歌人 N のような内面から表現を引き出す試みがカリキュラム上にうまく組み合わされて設定されていることが短期交換留学プログラムにおける言語と文化の学びを目指した日本語学習プログラムの理想形になるのではないかと思う。現に、谷川(2020)の報告にもあるように、2019 年 11 月に行われた高野山研修旅行のあと、その研修旅行をテーマに行われた現代短歌ワークショップでは、多くの留学生たちが高野山の雄大な自然や美しい紅葉、留学生全体で経験を共にした思いを短歌に盛り込むことに前向きに取り組んでいた。

ただ、中には俄には創作活動には馴染めない者や、真面目さゆえに完成度の高さにこだわりすぎて自縄自縛となり苦しむ者もいた。短歌が誰にでも取り組みやすい要素を備えているとはいえ、やはり相性というものはある。「ユニバーサルデザイン」的工夫があったとしても万人を救うことはないことを想定して、カリキュラムをデザインする教師はいくつかの足場かけやオプションの準備が必要となるだろう。

しかし、このカリキュラムでの経験の積み重ねが留学生にとってはかけがえのない人間的な成長を促すことになり、彼らを成熟した日本語の使い手へと育てていくことになるのではないかという期待もある。また、このカリキュラム運営に関わるのが教師だけではなく、複数の分野の違う文化の担い手も参加するという点にもメリットがある。森川(2022c)でも指摘した通り、学習者は目先の成果を要求しがちで日本語教師はそれに翻弄され、つい視野が狭くなるということがある。専門が異なり価値観も違う文化の担い手に少しでも関わってもらうことで日本語教師の視野狭窄を避けることができると期待できる。

今後、さらにオーセンティックな文化の学びを通して短期交換留学生在が自らの言葉と心を豊かに育てられるプログラムを構築していくため、Yijプログラムの修了生の追跡調査、及び、現在 Yij プログラムに参加中の留学生の反応や変化などを観察していきたいと思う。

謝辞

本研究のために貴重な時間を割いていただきインタビューに協力してくださった3人の方から謝意を表します。

なお、本研究は、令和3年度～令和5年度科学研究費補助金事業基盤研究(C)「日本で学ぶ留学生の学習動機を促進させる文化体験型授業の設計」課題番号2100611(代表：森川結花)の一環として行われました。

参考文献

- 青木直子・脇坂真彩子・小林浩明(2013)「日本語教育と芸術学のコラボレーション——大阪大学文学部における CLIL の試み」第二言語としての日本語の習得研究,16,91-106
- 国際交流基金関西国際センター(2008)『日本語ドキドキ体験交流活動集』凡人社
- 清水順子(2016)「CLIL 理論に基づいた「日本事情」の可能性——伝統文化から現代日本を理解する試み」北九州市立大学国際論集,14,147-155
- 谷川依津江(2020)「文化体験授業に対する短期留学生の期待と評価——アンケート調査とインタビュー調査の結果から——」甲南大学教育学習支援センター紀要,第5号,97-108
- 長谷川由香・池田幸弘・竹山直子(2021)『日本語で文化体験』アルク
- 細川英雄(1997)「言語習得における<文化>の意味について」早稲田大学日本語研究教育センター紀要,9,1-19
- 細川英雄(1998)「ことばの文化はどのようにして体得されるか:プロジェクト活動の達成と課題」早稲田大学日本語研究教育センター紀要,11,163-176
- 細川英雄(2003)「「個の文化」再論——日本語教育における言語文化教育の意味と課題」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』第5号,36-51,くろしお出版

- 森川結花(2021)「短期交換プログラム日本語コースにおける日本文化体験の意義と学習効果」
甲南大学総合研究所叢書 143 『文化の継承と日本語教育』 119-146
- 森川結花(2022a)「文化の担い手が日本語学習者に伝えたい”思い”に関する分析と考察：能楽師へのインタビュー調査より」『甲南大学教育学習支援センター紀要』 第7号,67-86
- 森川結花(2022b)「学習者を対話に誘う日本文化紹介動画教材作成の試み」『日本語プロフィ
シェンシー研究』 第10号, 33-42,
- 森川結花(2022c)「「私は文化を教えない」—ある日本語教師の懐疑的語り—」 CAJLE2022
Proceedings,153-162
- 米本和弘・濱田典子・高井美穂・水野亜紀子・加村彩・長谷川優子・葛西順子・北河利彦(2021)
「伝統芸能「紙切り」を題材にした異なる4つの実践—オンラインでの体験的な学びに焦点を当てて」『言語教育実践 イマ×ココ 現場の実践を記す・
実践を伝える・実践から学ぶ』 No.9, 50-61,ココ出版